



International Institute of Multi-Cultural Studies

特定非営利活動法人

国際比較文化研究所

■ Newsletter ■

Vol. 16 No.1 2015年 5月

鷺の宮卓話

明日何が咲くか

研究所理事長 太田敬雄

「一相互理解に基づいた 豊かで平和な地球社会を創るためにー」という研究所のモットーを考えるたびに考えさせられる事がある。それは、平和な地球社会は人類だけの問題ではないということだ。

最近、ネットでかごしま水族館の「沈黙の海」と書かれた小さな水槽の話を目にした。1997年開館のこの水族館の水槽は初代館長の吉田啓正氏の発案によるもので、それは何の生き物も展示されていない小さな青い水槽だそうだ。

水槽の隣にはメッセージが添えられている。

青い海 なにもいない
もう耳をふさぎたいほど
生きものたちの歌が聞こえていた海
それが いつのまにか、何も聞こえない
青い海

人間という生きものが
自分たちだけのことしか考えない
そんな毎日が続いているうち
生きものたちの歌がひとつ消え
ふたつ消えて
それが いつのまにか なにも聞こえない
青い 沈黙の海

そんな海を子供たちに残さないために
わたしたちは 何をしたらいいのだろう？

黒潮に乗って回遊するカツオなどの魚の水槽や錦江湾の生き物の展示を見て、最後にあるのが、この「沈黙の海」。何も居ない青い水槽。

話は変わるが、私は若い頃痩せていて、太ることは良いことで喜びだった。結婚して体重が増え始めるととても嬉しかった。ある程度増えると、そこからは体重に関する意識は変わらなくてはいけないのだが、

「嬉しい」という気持ちは変わらない。気持ちの変化は大変なことで、いつまで経っても「嬉しい」のだ。

人類も同じで、子孫を増やして繁栄することの喜びは簡単には消えない。今日の地球では明らかに人が増えすぎ、その事が他の生物の繁栄を妨げていることなど頭で理解できても、やはり増えて栄えることへの願望は簡単には変わらない。

その思いを変えなくては、柱を食い尽くすシロアリのように、母体を死に追いやる寄生生物のように、人類は地球を滅ぼす方向へとまっしぐらに走ることになる。

命あふれる・・・そして地球上の全ての命の源でもある・・・海が「沈黙の海」になるとき、それは同時に地上のあらゆる生命が絶える時である。今有る全ての命は大切にされなくてはならない。けれども、他の生命とのバランスを取り戻す努力が急務だ。それが他の命を頂いて生きている者の務めだ。

「青い 沈黙の海/そんな海を子供たちに残さないために」出来ることをしなくては、「平和な地球社会を創る」夢など絵空事にしか過ぎなくなる。この認識をしっかりと持った上で、「相互理解に基づいた豊かで平和な地球社会を創る」活動に取り組んでいきたい。それが出来れば、明日何が咲くかを楽しみに今日を生きていくことが楽しみになる。沈黙の海に花を咲かせよう。（「沈黙の海」は withnews 5.14.より）

2015年度総会及び理事会のお知らせ

2015年度の総会を6月28日(土)に開催します。会員の方のご意見を拝聴し、これからのIIMSの活動の方向付けをして参りたいと思います。

日時：2015年6月28日(土)午後2:00より3:00

会場：まなばるXD 安中市安中2456-2

議題：2014年度事業報告・会計報告、2015年度事業計画、予算、定款改定(役員定数・電磁的方法の活用)、役員人事。

同封のハガキにて出席・欠席をお知らせ下さい。ご欠席の方は委任状をお願いします。

《《なお、同日午前10:30より理事会を開催します。理事の皆様のご出席をお願いします。》》

ぐんまカップ

経過報告 ぐんまカップ企画運営学生スタッフ代表 菅谷佳名子

代表の菅谷です。
ついに！今月が日本語コンテストです！！
初めてのコンテスト運営、しかも会場はインドネシアと
いうことで運営スタッフも戸惑いながら準備を進めて
います。

その中でスタッフから聞く「楽しい！」という言葉。
そんなことを言ってもらえると代表として嬉しい限り
です(涙)
今回はコンテストの実施概要についてお伝えします。
まずエントリー状況ですが11大学52名の学生からエン
トリーがありました。
コンテストの開催地は東ジャワ州のマランですが、
100km離れたスラバヤ、350km離れたジョグジャカルタ
900km離れたジャカルタからも応募がありました！
私も3月にスラバヤ、ジャカルタ、ジョグジャカルタ、
マランを移動しているのでこんなに離れたところから
コンテストに来てくれるんだ、、、！と驚くのと同時に
身が引き締まります。ちなみにインドネシアのジャカル
タとマランは日本かというと群馬県と本州最南端の山口
県ほどの距離！

エントリーと同時に予選を行い、本選出場権を得たのは
出場するのは25人のインドネシア人大学生。
コンテストはエッセイとスピーチの総合点で順位を決
めます。この上位4人が群馬県にやってくるのです！

そしてこのコンテストの審査・司会・統括といった運営
をするためにぐんまカップスタッフ6人が渡航すること
になりました。ちゃんきむ(木村)、けいた(藤本)、
ねんちゃん(柏崎)、みつまる(福光)、やのみほ(矢
野)、わたし(菅谷)の6人です。
この6人を中心に審査、司会、大会統括などを行います。
6人というのは計画当初よりも多い人数で、みなさまの
ご協力があり増やすことができました。

【日本語コンテスト概要】

日時：2015年5月24日(日) 入場無料
場所：ブラウイジャヤ大学 人文学部ビル7F

【タイムテーブル】

11:00-11:30 受付
11:30-11:45 全体競技説明
11:45-12:45 エッセイ
12:45-13:15 休憩
13:00 開場(応援・見学はここから)
13:15-13:40 開会式(25分間)
13:40-14:50 スピーチ グループA(9人)
15:00-16:05 スピーチ グループB(9人)
16:10-17:00 スピーチ グループC(7人)
17:00-17:15 休憩・総合審査
17:15-17:40 閉会式

【エッセイ】

テーマは当日会場で発表します。なので、出場者の
みなさんはその場で考えて、エッセイを書いてもら
います！

【スピーチ】

持ち時間は1人4分で、その後審査員から1つ質問
をします。テーマは「はじまり」について。
とても大きなテーマですが、はじまりという言葉に
対する思いや経験、自分の考えを自由にスピーチし
てもらいたいと思います。

【審査員】

審査をするのはぐんまカップ学生運営スタッフから
4人とインドネシアにいる日本人留学生3人の合計7
人です！

コンテストに出場するのが学生ならば、審査するも の学生

というのがこのコンテストの特徴。
スタッフのおやすの言葉を借りると「審査する側さ
れる側の壁を低くしたい」という気持ちでこのよう
なかたちになりました。外部審査員として、マランに
留学している日本人学生の4人にも協力してもらえ
ることになりました！

【日本人学生との交流コーナー】

スピーチの時間、同じ7Fの別教室で日本人学生との
交流コーナーを設置。ここは日本茶を飲んだり、日
本のお菓子を食べながら自由に交流できるスペース
です！出場者もそのほかの人も誰でも入ることがで
きます。

<以上、READYFOR?に掲載したものを転載しました>

【コンテスト勝者】

最優秀者には 群馬県知事賞を
次点三名には 協賛社(者)の名を付した
ブレイス賞、峠の釜めし本舗おぎのや賞、
荒井美幸賞の賞状と盾が授与され、さらに8月に10
日ほど日本に・群馬に招聘されます。

ホストファミリー募集！！

8月にはコンテストの勝者たちを群馬に招聘し
交流の時を持ちます。

お盆の最中になりますが、8月15日にはホーム
ステイを計画しています。

ぐんまカップで来日する学生を、あなたの
家族の一員として迎えていただければ幸い
です。

ご連絡は太田または学生リーダー、菅谷まで

歴史をつなぐということ

常葉大学 1年

多文化交流サークル所属

多文化交流 in しずおか

代表 鈴木佳乃



今回で2回目となる「多文化交流 in しずおか 2015」は静岡県浜松市にある浜松市立青少年の家で2015年の2月17日から19日にかけて行われました。

前回のスタッフは常葉大学内外の有志でしたが今回は4月に設立された多文化交流サークル内で結成されました。スタッフをやりたいと集まったのはわたしを含め一年生12名。その半数以上が多文化交流を経験したことはありませんでした。わたしが多文化交流と出会ったのは2014年にあった「多文化交流 in ぐんま 夏」。それから約半年後には代表として静岡で多文化交流を開催することになりました。サークル内でのイベントや留学生のホームパーティーに呼ばれる経験はあるものの、スタッフとしてプログラムを作り上げた経験は無く、代表としてどのようにやっていくかとても悩むところでした。

昨年度の多文化交流 in しずおかの季節は夏、宿泊施設は由比でしたが今回の開催で決まっているのは冬であることと大体の日にちのみ。宿泊施設を決めるところからのスタートでした。今までスタッフの経験のないわたしたちにとって一からすべてを作り上げていくことは大変なことでした。実際に進めていくと指示出しが不十分だったこともあり、伝えた内容がスタッフ同士でうまくイメージできず進行に差が出てしまうなど余裕がないまま当日を迎えてしまいました。そして開催中も想定外のことがいくつも起きドタバタと落ち着けずにいました。そのこともあり、自分はスタッフとしてというよりも代表として何ができたのだろうかと終了後ずっと考えていました。そんなとき in しずおかの解散後、参加者で集まって配布したお昼ご飯を食べ、一部の参加者で浜松観光を行ったという話を聞きました。また、参加した常葉大学の学生がこのプログラムで出会った韓国の友達と連絡を取り合い、個人の韓国旅行でその友人と一緒に過ごしたという話を聞きました。わたしはこの話を聞いて少しだけ答えが出たように思います。普段の生活の中では出会うことのないような人たちを結んで交流する機会を作る。そしてその交流はプログラム終了後も続いていく。それをわたしたちで作らせたのだとやっと思えました。

2泊3日間のプログラムを一から作り上げるというのは経験のない私たちにとってすごく難しいことでした。考えが足りていなかった点も多くあります。ただ、2回目になる in しずおかの開催によりスタッフとして参加者として常葉大学から多くの学生が多文化交流に参加し、個々で何かを感じ取ることができたことは今後の多文化交流サークルにとって大きな意味をもたらすと 思います。静岡での多文化交流はまだまだ存在も内容も知られてはいません。国際比較文化研 (右上へ)

(左下から) 研究所としての「国際平和」という大きな最終目標はありますが、静岡ではまず少しでも多くの人に多文化交流を知ってもらい、関心を持ってもらえたらと思います。今回の多文化交流 in しずおかがそのきっかけの一つになれば幸いです。

これからも多文化交流を知ってもらうためにこの「多文化交流 in しずおか」をわたしたちの住む町で開催し続けていきたいと思っています。

多文化交流 in ぐんま

高崎経済大学 斉木雄作

2月13日(金)~15日(日)、「多文化交流 in ぐんま 2015 冬」が行われました。その3日間は起

こること全てが楽しかった。工夫を凝らした企画も、些細な会話一つも、料理の片づけも、単なる移動も、寒いシャワーも、とにかく全てが楽しかった。こうして文字にしてまとめるのがすごく面倒くさい。そのぐらいとても暖かくて、深い交流が出来た。なので、この文章はまとまった構成にならないと思います、すみません。自分はイベントスタッフの代表をやらしてもらいました。イベントの準備を3か月程前から他のスタッフ6名やその他関係者の皆さんと一緒に進めてきた。毎週会議を行い、たくさん話を話し合い、とても細かいところまで詰めて準備を進めていた。準備はとても大切でその準備あつての多文化交流だと思う。でも、自分にとってイベントの完成度はあまり重要ではなく、ただ単に友達をたくさん作りたいという気持ちでこのプログラムに取り組んだ。



待ちに待った当日、人数はスタッフや食事ボランティアを含め約50人。過去最大の人数だったが、不安は全くなかった。スタッフの皆を頼りすぎに信用していたし、イベント中が一番スタッフや代表であることを考えずに、参加者でいられることが出来るから。いろんな国の学生と話すことはもちろん楽しいが、日本人の学生や社会人の人との話もとても楽しい。自分は代表という立場であり見られなかった。スケジュールのことも大して頭にいれず、参加者に全部手伝ってもらったし、施設の管理人さんとの話も参加者がしてくれたぐらいだ(笑)。みんなが笑って手伝ってくれたし、ハプニングも問題も全てが楽しかった。本当にその場にいた全員と一緒に作り上げた「多文化交流」だったと思う。

誰かと一緒に何かを作り上げていくのは大変なこともあるが、とても楽しくて大切なことだと学んだ。イベントを通してたくさんの友達が出来、みんなと深い絆が築けたと思う。みんなとこれからもっと仲良くなって、この絆の輪をもっともっと広げて世界中、日本中に友達が出来ることを想像するととてもワクワクする。みんなに出会えて本当に良かった。文章だけじゃ伝わらないから、ぜひぜひ、みなさんこの活動に関わって欲しいです！

最後に、一緒に準備をしてきたスタッフのみんな、最高でした！本当にありがとう！

多文化交流 in マラン 2015

「パワフルお母さん断念」

群馬県立女子大学 脇 優美

多文化中毒にかかり早4年。今までスタッフとして活動してきた「in ぐんま」を後輩たちにバトンタッチし、一休みしようとしていた矢先、太田先生から「in マラン」の引率をしてみないか、とのお話を頂きました。海外多文化の引率となると責任も重大で、更に今まで経験してきたスタッフとは立場がまた異なるので最初はとてとても迷いました。しかし、自分が1年生の時に参加した「in マラン」を思い出し、多くの人にインドネシアの魅力を感じてもらいたい！海を越えても繋がり続ける交流があることを知ってもらいたい！という気持ちが強くなり、引率を務めることを決めました。その際、大学の先輩のあんなぶこと、増井杏奈さんにも呼びかけ、共に引率として始動しました。

なにより大変だったことが、参加者集めでした。多文化交流自体を知らない方には、多文化交流とは何かという説明と今回のイベントに関する説明を、また、関わりのある方にも今回のイベントのお誘いを約2か月間呼びかけました。しかし文面や口頭でのアプローチを上手くすることが出来ず、個人的には満足行く参加者集めが出来ませんでした。自分がどうして多文化中毒になり、入学時から活動を続けているのか、という想いを上手く伝えることが出来ずとてとてももどかしさを感じていました。

そんな中、でっち・きむら・かんち・きみこ・あきら・ゆきゆき・やの・ひろゆき・ふじもと+恩幣ファミリーが申込みをしてくれ、本当に本当に嬉しかったです。引率を務めるにあたり、参加者全員に楽しかった！参加してよかった！また会いたい！と思ってもらえるよう、私はみんなの「パワフルお母さん」になることを密かな目標にしました。

みんなとの初ご飯ゲスト、飛行機に慣れていて少しもぐずらないちびっこたち、出待ちをして迎えてくれたスラバヤ空港、錠前と鍵を使ったペア対面式、大きな大きな多文化フラッグ、大雨の中GHで食べたピサンゴレンとサテ・ジルバブが非常に似合う日本人参加者には勝てなかった伝統衣装体験、大雨に打たれてみんなで雨宿り、からの大学でのディスカッション、夢が結婚フー！で盛り上がる学生たち、緊張気味のぐんまカップの宣伝、伝統的な遊びであるチョンカにはまる女子、性格が面白いくらい露呈するパティック体験、各々楽しんだホームステイ、ファミリーとの涙のお別れ、熱を出し海を断念した社長、お尻が飛び跳ねるほどのガッタン道、砂浜で貝殻拾いに没頭するひげじい、アイスの食べ過ぎでお腹を壊した小さな子、石の床で受け身を取り男を投げ飛ばすへビメタ娘、あたりまえ体操～ラッソングレライ～、紙飛行機での浴衣着付け争奪戦、それを勝ち取る長身男子、グラサン社長と共にギターを弾き語る男子、グラサン社長の全部当たりのあみだくじ、サプライズスライドショー、みんなでフォー



チュン、インドネシア語のどらえもん、インドネシアポップ、玉すだれを使ったインドネシアクイズ、背中を机にして遊ぶ伝統的なゲーム、みんなで心のプラカード、スラバヤ空港でのキャンディーとの合流、、、と、つらつら書きましたが、これ以上に書ききれないくらい充実した8日間を過ごすことができました。

「パワフルお母さん」になると、かっこつけな目標を立ててはいたものの、こう振り返ると1番子供みたいにはしゃいでいたのは自分でした。それも、私が自由に好き勝手できるような環境を作ってくださる太田先生、一緒に引率をしつつ支えてくれたあんなぶ、どんな時も盛り上がりまくりでパワフルな参加者のみんな、体調管理に気を付けてねと私たちを気にかけてくださった恩幣ママを筆頭とする恩幣ファミリー、そして私たちのために企画を練りに練り、そして、プログラム中ずっとお世話をしてくれた現地スタッフのみんながあったからであると強く思っています。ありがとうございました。また、私は2度目のインドネシアを経験し、更にインドネシアが大好きになりました。突然訪問したにも関わらず、おかえりー！と、温かく迎え入れてくれた2年前にお世話になったホストファミリー、仕事終わりにアイクでわざわざ会いに来てくれた友達、有給を取ってまで会いに来てくれた2年前のパートナーと友達。人との繋がり温かさを身に染みて思いました。

海を越えてもこうやって友達と繋がり続けられることを、今回始めて多文化に参加してくれた方も感じてもらえたと思っています。異文化に触れ合う中で、楽しい！嬉しい！暑い！お腹へった！疲れた！なにこれ！おいしい！といった様々な感情を共有することが、互いの文化への理解を感覚的にさせてくれている、と感じています。色々な文化に触れる際、異文化とはこういうものでこうでこうで、と頭で考えるより、気付いたら自然と感覚的に受け入れていた、というような経験と気付きを与えてくれる多文化交流を、私は更に多くの人に知ってもらいたいと思っています。多文化交流をきっかけにできた友達とこれからも繋がりつつ、更にその繋がりを世界中に広げられるよう、これからも活動し続けたいです。



お世話になったゲストハウスでのお別れ会
大いに盛り上がりました

多文化 in マランに参加して
明治大学国際日本学部
藤本恵大



今回初めて多文化に参加させてもらいました藤本です。参加のきっかけはインドネシア人の友人からの誘いです。僕は元々インドネシアへの留学を考えていたので、多文化に参加する前からインドネシアには強い興味を持っていました。今回も多文化が始まる前からマランへはインドネシア語の勉強のために滞在していました。

最初僕の中では、この多文化はあくまで語学留学の‘ついで’という位置付けでしかありませんでした。しかし、今こうしてあの一週間を思い出すと、あの一週間が僕の滞在の中で最も早く過ぎていったと感じます。本当に今回参加できて良かったと心から思います。それは、単に楽しかったからだけではありません。僕に新しい出会いをくれたからです。

その出会いは三つあります。一つは人と、です。今回の多文化を通してインドネシア人と、日本人と様々な出会いがありました。その全てが心を踊らせてくれるものでした。みんな何か一つ熱中しているモノ、全力で取り組んでいるモノを持っていて僕にはとてもそれが羨ましく、そして何より輝いて見えました。「もっとこの人の話を聞きたい」、「あの人の考えを聞きたい」、その好奇心に満たされながら僕は一週間過ごしていました。人見知りの僕が話しかけるのに躊躇する時間があまりに惜しいと思える位の素晴らしい仲間がこの多文化にいました。僕がこうありたいと願っていた理想の姿を持った同世代の仲間と囲まれることは何よりの宝でした。大学という枠にとらわれず一歩外に飛び出すこと、たったそれだけの事で僕はかけがえのない出会いを手にすることができました。

二つ目は私の新しい価値です。多文化は、日本語で海外の方と交流することに主眼をおいています。僕はインドネシアへは語学留学に来ていたので、当初そのことに疑問を感じていました。しかし世界には、こんなにも日本語に熱中してくれている人達がいることをこの多文化で知りました。そして、それは僕に新しい価値を見出してくれました。日本語を不自由なく話せるということです。この日本で暮らしているとその価値を見出すことはなかなかありません。なぜなら、それは当たり前のことだから。しかし、一歩外に出ると当たり前前は当たり前ではなくなります。日本語が大好きで一生懸命勉強しているインドネシアの友人を目の前にして、僕は初めてこの当たり前前のことの価値、そして自分の価値を感じました。当たり前前と思っていたことが人の役に立てる、そんな新しい自分自身の価値に出会うことができました。この多文化を通して今後僕がインドネシアで

過ごす時間で出来ることを一つ知ったと思います。英語が話せなくなつて、僕たちは日本語だけでも世界の人たちと繋がって同じ世界を見られるのです。普段価値を見過ごすことが多いこの日本語だけでも、世界の人達と同じ空を見て、綺麗だと笑えることが出来るのです。日本語を必要としてくれる人がいるのなら。

三つ目は僕が熱中できるモノと、です。今回この多文化に参加することで僕は‘ぐんまカップ’に出会いました。比較文化研究所が行うインドネシアの日本語を学ぶ学生を無料で日本に招待し過ごしてもらうという企画です。この多文化 in マランに参加してから本格的に僕もメンバーに入れてもらいお手伝いさせて頂くことになりました。お世話になってきたインドネシアの学生の方、それだけでなくインドネシアの人達、強いてはインドネシアと日本の関係の役に立てるものだと確信しています。この企画を通して少しでもインドネシアにお返しができると思っています。この‘ぐんまカップ’は人の役に立てる、そして僕が熱中できる、そんな僕が心から欲していたものです。これからの僕の日常を変えてくれる、とてもやりがい満ちあふれ、情熱を持って全力で取り組める企画だと、この出会いに感謝しています。

僕は大学に入学してから心の中に違和感や不満を感じながら過ごしていました。それは僕が何の役にも立っていなかった自分の不甲斐なさから起因するものでした。最初はそれを大学や周りの環境のせいにして不満ばかり漏らしていました。しかし、最初に述べた多文化の仲間たちとの出会いの中で、それは自分が何もしなかったからと気づきました。みんな自分から手を伸ばして、一歩踏み出すことでそれぞれの理想を追い求めていたからです。そして、三つ目の‘ぐんまカップ’に出会いました。この出会いが何の役にも立たなかった自分を変えてくれるモノだと確信しています。なぜなら、僕は日本語を話せるからです。それだけですら、人の役に立てるということを今は知っているからです。この多文化を他の学生さんにも強く勧めたいと思います。特に、自分が何をこの大学生活ですべきか悩んでいる方へ。きっと、ここにはそれを自分で見つけるだけのヒントが散りばめられていると思います。多文化はこの短い四年間という限られた大学生活を更に豊かなものにしてくれるものだと思います。こんな僕にも世界を繋ぐ架け橋になることは出来ます。僕たちを必要としてくれる人達はすぐそこにいます。

最後になりましたが外に飛び出すことを教えてくれた多文化参加者の皆さんに心からお礼申し上げます。そして、現地マランで僕らの為に、時に体を壊しながらも懸命に最後までサポートして下さいました。インドネシアのスタッフの皆さんにも心からお礼申し上げます。人生最高の一週間をありがとうございました。



研究所からのご連絡とお願い

- 1、研究所ホームページ、Facebook、まなばるホームページは見ただけでしたか？前回もお知らせしましたが、今回さらにクラウドファンディングのREADYFOR?にも「ぐんまカップ」が登場しています。ぜひ一度開いてみてください。READYFOR?では40万円を目標に募金しましたが、50万円を超えるご寄付を頂きました。さらに、国際交流協会からの助成金もおりることが決定しました！
- 2、会費とご寄附のお願い：2015年度が始まって約一ヶ月が経過しました。研究所の活動は、基本的に皆様からの会費とご寄附によって支えられています。これまで同様に会費・ご寄附でお支え下さいますようお願いいたします。会員以外の方も、数年に一度で結構ですから、ニュースレター郵送代程度のご寄附をお願いできれば幸いです。

会費・寄付（2015年1月1日～2015年5月10日）敬称略

<会費> 青木洋子、藤平久代、間庭有美子、太田敬雄、小川美幸（14・15）、上田暢子、奥田聖幸、杉浦印刷、岩井均、今井睦子、新澤誠治、遠間徹也、前田武男、佐藤秀男（15）、星野敏子（15）、星野富雄（15）、伊藤優子、前田浩、前澤優子、木村真弓、鈴木布美子、中司和雄、板垣剛（13・14）。

<寄付>

○一般寄附 山口雅美、間庭有美子、黒田絢、新澤誠治、萩原和子、村井田和夫、狩野真由美、佐藤秀男、キムサヨン・結子、池田章二、前田浩、山田美和子、鈴木諭香子、高橋玲二、

○招聘。

○多文化交流 青木洋子、村井田和夫、キムサヨン・結子、

○まなばる 山口雅美、村井田和夫、キムサヨン・結子、前澤優子、鈴木布美子。板垣剛（x2）

○ぐんまカップ寄付 山口雅美、滝本印店、恩幣宏美、熊倉浩靖、キムサヨン・結子、内野春香、Sunyoto Harutono、都丸秋子、イリサワシオリ、朝岡伸江、坪井教由、ハラル定例会、冷泉公裕。

○ぐんまカップ協賛 増井直実、磯部ガーデン、株式会社荻野屋、クリーニングサトウ、マルシン産業株式会社、株式会社ビズクリエイト、川上機工(株)、シティメガネ城田、(株)ヤマハチクボニワ、株式会社アミイダ。

《編集後記》

◇三月に発行予定だったニュースレターの作成が延びに延びて5月も中旬になってしまいました。総会も遅れて、6月末になってしまいます。会員の皆さまには大変申し訳ありません。

◇四日後にはインドネシアへ「ぐんまカップ」の日本語コンテストに出かけます。大変ユニークなコンテストに多くの応募者、そして企画・運営のスタッフ共々に興奮していることでしょう。成功をお祈り下さい。

◇六月には、道草組の小森谷さんのお陰で、学生時代に「多文化交流 in ぐんま」を体験された女屋歩美先生との茶話会も実施できることになりました。すでに小学校の先生になられて4年目！ぜひ気軽にご参加下さい。 T

ぐんまカップのスタッフ会議の一人はマです。真ん中のパソコンの一人はスカイプで会議に参加しています。時代は大きく変わりつつあります。



発行 特定非営利活動法人国際比較文化研究所

事務所：〒379-0124 群馬県安中市鷺宮 3413-3

電話：027-382-5998 FAX：027-382-6393

研究所ホームページ：<http://www8.wind.ne.jp/mthc>

まなばる：<http://manapal.gunmablog.net/e80854.html>

郵便振替口座番号：00510-1-61974

加入者名：国際比較文化研究所